

学生とシニアの対話イン九州2011 報告書

平成23年12月2日

SNW九州幹事 米永國照



1. 実施概要とスケジュール

SNW九州の対話活動としては、震災前に実施した福岡教育大学に続く第2弾となった。今回の対話の特徴は、初めて、SNW九州主体で取り組んだことである。

なお、日程調整、当日の時間スケジュール設定、対話テーマの選定等は、学生幹事に主体的に動いてもらった。

(1) 日時：平成23年11月11日（金）13:00～17:30（引き続き懇親会）

(2) 会場：九州大学伊都キャンパスウェスト2号館701号室

(3) 出席者：

- ・学生（全員エネルギー量子工学専攻）：20名（M2：5名、M1：7名（内女子2名）、B4：8名）、
- ・シニア：11名（大塚徳勝*、金氏顯*、桑野剛士*、佐伯仁*、中村重太*、橋場隆**、樋口勝彦*、松岡信明*、松永健一**、米永國照*、路次安憲**）
—：初参加者、*：SNW九州、**：関西
- ・教員：1名（稲垣八穂広・エネルギー量子工学部門助教授）
- ・原文振：1名（関口祐子主任）

(4) タイムスケジュール (担当シニア) :

- 13 : 00~13 : 15 開会の挨拶 (稲垣先生)、シニアの紹介 (金氏顯)
- 13 : 15~14 : 00 基調講演 (金氏顯)
- 14 : 00~14 : 15 ファシリテーションのガイダンス (金氏顯)
- 14 : 15~16 : 30 グループ対話、まとめ
- 16 : 40~17 : 10 グループ別発表
- 17 : 10~17 : 30 講評 (路次安憲&大塚徳勝)、閉会の挨拶 (金氏顯)
- 17 : 45~19 : 15 懇親会 (開会挨拶 : 米永國照、中締め : 桑野剛士)

(5) 配布資料 :

- ① SNW対話イン九州2011 ファシリテーション要領、ファシリテーション用紙
- ② 基調講演資料 (福島第一原発事故の原因と今後の安全/環境修復/エネルギー/原子力産業)
- ③ メンバー表

2. 開催挨拶

<稲垣先生>

本日は、通常の大学の授業では聞けないことを学べると思えるので、シニアの方としっかり対話に務めて欲しいという主旨での挨拶があった。

3. 基調講演

<金氏顯>

「東電福島第一原発事故の原因と今後の安全/環境修復/エネルギー/原子力産業」と題し、次の内容での基調講演をした。

- ①事故の原因と安全対策
- ②東電福島第一原発の今後
- ③我が国の今後のエネルギー
- ④我が国の今後の原子力産業

4. グループ対話と発表

下記5グループに分かれて、ファシリテーション方式 (F T) で実施した。人員構成は、各グループ共、学生4名、シニア2名である。各グループのF Tは、シニアが務めた。対話終了後、グループ別に学生がまとめの発表を行なった。

第1 グループ「テーマ：今後のエネルギー政策」

- ・学生：多田雅彦（M2）、宮一郎（M2）、武田智也（M1）、大島渉（B4）
- ・シニア：樋口勝彦（FT）、松永健一
- ・状況：討議は、次の論点からの個々の学生の疑問、質問に対して、まずシニアが意見を述べ、続いて他の学生が述べる形で淡々とだが、熱っぽく進められた。
 - ① 事故を受けて日本のエネルギー政策がどうなっていくか。
 - ② 今後も原子力を続けるメリットとは。続けるためにはどうすればよいか。
 - ③ これから自分がどうすべきか、何ができるか。学生に求められる能力とは。

「グループ別発表」で、それらは整理された形で発表されたが、最後の「自分ならこう考える！こうする」では、各自が自分の意見をハッキリと述べた。その中で、中学2年生のニーズ（エネルギーについて学び、中学生で何ができるかを考えたい）に対して、実験（空気中の放射線を実測）を含めて、原子力とは何かを、修士学生5名が「エネルギー教育@中学校」を開催したとの発表があった。

個々に発表して他人の意見を尊重する姿勢と、自らも教育に参加する行動力は素晴らしい。

なお、発表後、次の質疑があった。

Q. 中学生を相手にした教育について、誰が、どういう理由で、何を行ったのか。（金氏氏）

A. エネルギー量子工学を専攻する修士課程の5名が、中学校のニーズ（エネルギーについて学び、中学生で何ができるかを考えたい）を人づてに聞いて行った。中学2年生を相手に、原子力とは何かを、実験（空気中の放射線を実測）を含めて説明した。中学生はちゃんと聞いてくれた。（M1 武田智也氏）

第2 グループ「テーマ：原子力発電と代替エネルギー」

- ・学生：甲斐貴之（M2）、笠野貴之（M1）、山村由貴（M1）、菊永大貴（B4）
- ・シニア：米永國照（FT）、佐伯仁、中村重太（オブザーバー）
- ・状況：学生のリーダーが対話の論点を事前に要領よく纏めておいてくれたので、対話はスムーズに進行した。その論点は以下のようなものであった。
 - ① 現在の日本及び欧州の電源構成の再確認と将来のあるべき電源構成。
 - ② 電源別コストの再評価は、今後のエネルギー政策に影響を与えるか。
 - ③ 新エネルギー（太陽光、風力、地熱、メタンハイドレート）は原子力の代替エネルギーになり得るか。
 - ④ 原子力と新エネルギーのどちらで日本は国際競争を勝ち残るか。

これらの論点の整理に見られるように、対話では、決してまず原子力ありきではなく、いったん初心に帰って、取るべきエネルギー政策について学生とシニアと一緒に考えた。

最終的には、原子力の構成比率は、現在の日本及び欧州全体の構成比率である3割程度はどうしても必要という結論に落ち着いたが、ここに至るまで、学生とシニアは大いに意見を交換することができた。

最後に、本グループのテーマとは直接関係ないが、学生側からの要望で、「原子力と金」の問題に関して、電源三法交付金についてシニア側が説明した。

第3グループ「テーマ：汚染地域の今後」

- ・学生：長谷川悠（M2）、中村裕也（M1）、玉利南菜子（M1）、荒巻優希（B4）
- ・シニア：橋場隆（FT）、松岡信明
- ・状況：対話への期待として、「原子力に対するシニアの考え方を知りたい（原子力になぜ携わったか、考えは変わったか）」「福島第一の事故について理解を深めたい」「原子力発電（業界）の今後について話し合いを通して自分なりに考えてみたい」があげられた。

また質問・疑問として、「汚染地域の除染はどの程度まで必要か」、「除染後の廃棄物はどうするのか」「これらの地域はいずれ住めるようになるのか」「緊急時対策区域として半径10km圏内は妥当か」などがあげられた。

前者については、シニアが就職した当時は、科学技術振興による日本発展への期待・希望が社会全体にあり、そのような期待感・使命感の中で原子力関連の仕事に携わるようになったこと、現在は福島第一の事故によって日本の原子力開発史上最大の岐路に立たされているが、長期的・国際的視点に立てば原子力発電・技術の必要性・可能性は不変であり、今後も誇りを持って携わっていきたいし、携わって行って欲しいと信じていることを話し合った。

後者については二人のシニアとも福島県内の線量測定または除染作業への参加実績があることから、その時の経験やこれまでの政府の検討状況、海外での実績を踏まえて意見交換を行った。その結果、除染作業については一時的な仮置きも含めて廃棄物の保管場所とコスト（費用、人員確保）が課題であり、住民が納得できるように住民参加のもとで方法・範囲等を決めていくことの重要性を指摘するに至った。また、汚染地域で人々が安全性について納得して暮らすには最終的に食物の汚染管理が最大の課題となると予想され、作物の汚染防止技術の開発や食物の放射能測定値の情報公開、そして暮らしのベースは地域経済でありそれを支えるために日本全体の温かい支援が欠かせないことなどを話し合った。

第4グループ「テーマ：事故で発生した放射性物質の処理・処分」

- ・学生：松本卓（M2）、田尻康智（B4）、川内善晴（B4）、阿部達広（B4）
- ・シニア：金氏顯(FT)、大塚徳勝
- ・状況：学生4人の質問、疑問、意見等から次の3つのサブテーマにつき対話することにした。
 - ①事故で発生した放射性廃棄物の処理の研究、中間貯蔵や最終貯蔵の場所
 - ②地震津波の対策、今後起こり得る事故と対策
 - ③今後の我が国の原子力はどうか、何故原子力分野へ就職したか

上記3つにつき、まずシニアから回答しながら、学生にも意見を聞きながら対話を進めた。特に③については経験談やそこから得られた教訓や学生への助言などに学生達は大変関心を持った様子である。

「グループ別発表」では、これらを要約し感想も交え発表、質疑応答は次の通り。

Q. 汚染土壌の最終貯蔵場は福島第1原発構内とのことだが県民の理解は得られるか？

A. 県民感情からは難しいが、県外はより困難であり、原発構内の瓦礫などと一緒に処分するのが合理的と思うので、粘り強く理解を得るしかないと思います。

第5グループ「テーマ：事故の原因と今後の対策」

- ・学生：河内昌平（M2）、浮池亮太（M1）、堀江達郎（B4）、竹田祥平（B4）
- ・シニア：路次安憲(FT)、桑野剛士
- ・状況：シニアからの自己紹介の後、学生4人からそれぞれ、「今日の対話に期待すること」「質問、疑問、要望」などを聴取した。学生の質問、疑問、意見等をグループ分けした上で、以下の3つのサブテーマについて対話を進めた。対話は主として個々の学生の質問、疑問にシニアが答える形で実施した。
 - ①福島事故の原因、収束方法、今後の安全対策
 - ②原子力に対する国民感情、反対論の歴史的背景等
 - ③古いプラントと新しいプラントの相違（古い原発の停止を見込んだリプレイス計画の再構築関連）

①については、技術的な問題だけではなく、電力会社の体質、国のチェック体制の甘さなどにも学生の関心が高かった。②に関しては、残念ながら原子力は常に政治問題化（イデオロギー化）されて絶対反対が存在する。世論もブレル

ことが多いため、世界状況を見据えてしっかりとした価値観を築いていきたいとの意見が多かった。③に関しては、古い原発といっても中身は更新されているので設備が老朽化しているわけではないが、設計思想やシステム構成上では新規プラントの方がより安全性は高いとの共通認識が得られた。

「グループ別発表」で、事故原因において「ロジックの詰めの甘さ」との表現があったことに対して意味を問う質問があった。学生からの回答は、「全交流電源喪失事象などに対してP S A等により細かく詰められてはいたのだが、“それでも発生することがある”として対策を検討するまでに至っていなかったことを言いたかった」。

5. 講評

<路次安憲>

プレゼンテーション（「グループ別発表」）については、どのグループも要点を明確にして、大きな声で物怖じせずに発表できていた。グループ別で内容の良かった点は以下のとおり。

- （第1グループ）常に新しいことを学び続けて安全性を高めたいとの前向きな姿勢を打ち出したことが良かった。また、グループの学生4人がそれぞれ決意表明する手法も好ましい（後続グループにも影響を与えた）
- （第2グループ）発表の要点を一覧表で示した点が良かった。質疑応答も優れていた。
- （第3グループ）科学的リテラシーを高めたいとの意識、除染については地元の人たちととことん話し合い、納得づくで進めるべきとの提案。
- （第4グループ）放射性廃棄物の処理・処分について、困難ではあるが合理的で具体的な提言があったこと。質疑応答も充実していた。
- （第5グループ）技術的な原因にとどまらず、組織論、国の体制等も議論されていたこと。自分の価値観をしっかり持ちたいとの決意表明も良かった。

<大塚徳勝>

対話終了後のグループ別の発表を通じて感じられたことは、「原子力は深層防護ではなかったため、確かに今回、大量の放射性物質を広範に拡散させ、放射性廃棄物の処理・処分などの厄介な問題を引き起こした。しかし、自然エネルギーが量的にも質的に見ても、原子力の代替エネルギーになり得ない以上、原子力は従来の政策の反省に立ち、津波対策・防水対策・電源喪失対策・水素爆発防止対策などを講じる一方、規制の強化を図って出直すべきである。」との肯定論であり、安堵している。

対象が原子力を専攻している、B4とMの学生であったためか、関心は高く、問題提起も質問の中味も専門性が高く、総じてレベル9（最高レベル10として）を与えたい。

6. 閉会挨拶

<金氏顯>

3.11以降の学生とシニアの対話はこれまで5回開催、今回は西日本で初めての開催で、九大では2年ぶり4回目の開催です。シニアは出来るだけ皆さんの疑問・質問に答えながら対話をしましたが、少しでも解消出来たら幸いです。対話会は大変スムーズに行うことが出来ました。これは学生幹事の松本卓君を中心とした準備チームのお陰です。またご指導頂いた稲垣先生にも感謝申し上げます。SNW九州を設立しましたので、この九大での対話会は隔年でなく毎年開催したいと思います。今日参加のM1やB4の学生には来年もぜひ参加して下さい。今日は実り多い対話会が開催出来、有難うございました。

7. 参加シニアの感想（50音順）

<大塚>

フクシマでの大事故の後、わが国では、脱原発・反原発の潮流が大きくなっているのでこれからのエネルギー安全保障を危惧していた。

しかし、今回の「学生とシニアとの対話」では、相手がエネルギー量子工学専攻の学生であったためか、一部には文明論的視点から、原子力に対する将来へ不安が垣間見られた程度で、大方は現状のベストミックスを踏まえて、原子力を肯定していることが分かり、安堵している。

土壌の除染、汚染瓦礫の中間貯蔵、放射性廃棄物の処理・処分、溶融燃料の処理や原子炉の安全対策などが山積している中、放射性廃棄物の処理・処分を専攻している学生諸君がさらに成長して、これらの国家的難題に取り組んでくれることを期待したい。

今回の「対話イン九州 2011」の学生諸君は、さすがに関心は高く、総じてレベルの高い対話ができ、シニアとしても満足感を覚えた。

<金氏顯>

原子力事故の一般市民への心理的影響は東高西低（東が高く西が低い）だが、九大学生の関心度は東北大学生と変わらない。東電福島事故の原因や対策、今後の環境修復、そして我が国のエネルギー政策の行方に大きな関心を寄せている学生20人が集まってくれた。やはり原子力を専攻し、将来の進路として考えているので真剣になっていることが良く分かった。学生20人の内、男子18人、女子2人、男子は草食系でなく肉食系九州男児、女子もシッカリした考えを持っており、頼もしく思った。シニア10名中、九州会員が7名、関西より3名と、西日本会員主体に開催することが出来た。来年からもSNW九州が中心となって、毎年開催するようにしたい。

<桑野剛士>

今回 初めて学生とシニアの対話活動に参加しました。学生の質問にきちんと答えられるだろうかという不安もあり 過去の資料をひも解いて少し準備もしました。また、東北大震災後の懇談会ということもあり、偏重したマスコミ報道に毒されていないかということも気にかかっていました。按ずるより産むが易し。私の多くの心配は杞憂に終わりました。学生の皆さんは 概ね冷静な判断をお持ちで 原子力の必要性もしっかり認識しており基本的な認識は私のそれとそれほど差がないことがわかり一安心でした。後は私の会社での経験談などを交えながら お話が進み 結果として我ながら有意義な意見交換ができたと考えています。グループの中には修士課程の方もいらっしゃいましたが原子力に限らず歴史などもよく勉強されている感じで感心しました。最後に進行役を務めていただいた路次さんに おんぶにだっこで 本当にお世話になりありがとうございます。

<佐伯仁>

グループテーマは“新エネルギーが原子力の代替となり得るか”ということでしたが、H12年、原子力を出て以来、主に代替エネルギー関連（地熱、風力、バイオマス、太陽光等）の実務に携わった経験を基に話をさせていただいた。

その結果、今後も再生可能エネルギーの増加と節電の必要性は認めるものの、現在の個人生活レベル、社会経済活動を維持するならば、再生可能エネルギーは量、コスト、占有面積などの面から一国の主電源として、原子力にとって変わることは不可能で、原子力の運転を再開し、現在までの電源構成比を維持するしかないことを十分に理解していただけたと思う。

また、太陽光、風力等の自然エネルギーを電力系統末端に大量投入すると、出力、電圧に対するコントロール（スマートグリッド）が必要になるなど課題のあることも合わせて説明した。

私にとっては初めての学生達との対話で、楽しい一時を過ごすことができ、学生達も自分が将来進むべき方向を考える上での、大事な話と思っているのか終始、真剣な質疑応答だったのが印象的でした。

<中村重太>

SNW 主催の「対話」の催しに、原子力に全く素人の私がオブザーバーとして参加することを承諾して下さったことに、まずは関係者に感謝を申し上げたい。

今回の参加は、やはりオブザーバーとして参加した昨年度の福岡教育大学での対話会に続いて2度目でしたが、今回の運営が学生によって進められ、対話会自体も非常にスムーズに展開されていったことが、私には大変に印象に残りました。参加者は大学院生が主であったとはいえ、彼らは企画力や運営力に素晴らしく長けているとみました。

私は第2グループのテーブルに着いて、学生とシニアの討論内容を聴かせてもらい、新エネルギーの問題について勉強させてもらいましたが、そこではグループリーダーの姿に魅せられました。シニアは学生からの事前の質問に関して、関係資料を作成し、対話の進行を想定してきていたようですが、対話が始まると学生が用意したシナリオにそって質問がなされ、事前に調べたデータをもとにシニアに迫る討論が展開されていきました。学生からの鋭い質問にシニアが専門的に説明を加える、私からみると理想的な学生主体の対話学習が展開されました。さすがに原子力を専門とする最高学府の学生だと感心させられました。また、学生とシニアの真剣な議論には、終えて爽やかさを感じました。

<橋場隆>

福井県美浜町において対話の場を設定する調整役として参加したことはありますが、対話自体に参加したのは今回が初めてです。より能動的立場で参加することによって前回の見てのだけよりずっと楽しい時間を過ごせました。一般の文系学生に原子力や放射線の講義を時折しているのですが、議論の前提となる科学的知識のまどろっこしさ無しに、原子力発電の今後を真剣に考えている若者と率直に前向きな意見交換をできることは、シニアにも活力を与えてくれる場になっているのではないかと思います。

しかし、この日本で、汚染地域の除染や復興について話し合う日が来るとは、私自身も全く想定していませんでした。福島第一発電所周辺の多くの住民が不便な避難生活を余儀なくされ、その他の原子力発電所においても定期検査後の運転再開が滞っている現状を見ると、これから原子力業界に身を投じようとする若者が悩むのは当然だと思います。状況から容易に想像できることなのですが、若者自身だけでなく彼らの進路の行く末を案じる身内の意見の重さ・懸念も伝わってきました。

けれども、これからの日本の原子力産業を支えていくのは目の前にいた若者達に違いありません。「福島の復興なくして日本の復興無し」はそのまま原子力産業にも通じる言葉です。しかしながら、人材なくしてそれが達成されないのは言うまでもありません。彼らが身内の意見との葛藤で悩まずにすむように、我々にもまだまだやること・やれることがあるはずだとの思いを深めました。

<樋口勝彦>

震災の報道が続く中での九州で初めての対話となったが、学生たちは不安要因を内包するものの、思ったより気丈で冷静に将来の各自の果たすべき役割をシニアに確認する形で核心をついた質問を用意しており、ある意味次の世代に期待をして良いのではないかと感触を得た。

原子力は総合工学・理学であり、基礎的なものを幅広くしっかりとつけておく事さえしておけば、活躍の場所は日本だけでなく世界に用意されており、40年の経験の中で少

なくなかった苦難との遭遇を差し引いても、魅力のある広く世界に貢献できる日本の技術であるとのシニアの回答に勇気付けられた様子を見て取った。

今回の事故は天災か人災かとの質問に対して、損害賠償のあり方での議論は残っているものの技術論からは人災であり、そのように捉えて今後各分野の課題に想像力を働かせて対処する必要があるときっぱりと答えたが、天災の答えを期待した様子はなく額面どおり捉えてくれたようである。

もしこのような情勢でもあなたなら原子力産業に就職するかとの質問には切実な内面を吐露した葛藤も見えてとったが、今回の対話の中で原子力の勝利も変わらぬ使命と取り組む心の整理ができるものと期待している。

今回正式には始めてファシリテータを務めたが、電力出身の私にメーカー出身で幅広い経験と資格を有する松永健一様が副として参加いただき、学生たちの質問に異なる視点から答えることが出来て大変効率よく対話を進める事が出来た。

業務の都合で発表と懇親会には参加できなかったことが心残りではある。

<松岡信明>

初めて参加いたしました。金氏様を中心としたシニアの方々と松本君を中心とする九大の学生諸君の綿密な準備がなされており、大変感心しました。私たちのグループのテーマは「汚染地域の今後」でしたが、テーマに関係なく学生諸君の関心は「原子力の今後」にあると実感しました。学生諸君自らは原子力の可能性についてポジティブに考えていることがわかり安心した反面、彼らの身内や周囲がネガティブな考え方を持っているのも、これが彼らの大きな悩みであることも知りました。私たちシニアが彼らの悩みにどう応えていくかも問われると思います。

汚染地域の話では、たまたま正のファシリテータを務められた橋場様も私も事故後の現地活動に参加した経験があり、現地情報に基づくコミュニケーションが出来たと思います。公表されている今後の対策については、もし実際に実施するとなれば大変な費用を注入することになり、その場合は経済性或優先順を検討する必要があることなど、九大のエネルギー量子工学専攻学生との対話ならではのかなり突っ込んだ話になりました。対話終了後の交流会にもほとんど全員の学生が参加していたようで、こちらでもシニアと学生の熱心な議論が繰り広げられ、有意義であったと思います。今回急に副のファシリテータを務めることになりましたが、橋場様の主導により無事に終了できましたことに感謝します。

<松永健一>

対話後、「エネルギー教育@中学校」に参加した武田智也君の Facebook を拝見した。そこに掲載された 12 枚の写真を見る限り、「中学生はちゃんと聞いてくれた」という発表のとおり、写真の中の中学生は生き生きと聞き、修士学生とリラックスして懇談してい

た。ある意味で「学生とシニアの対話」のようなことが、中学生と修士学生の間で行われており、特筆すべきことである。

私は「学生との対話」に初めて参加したが、日本の将来に「確かな希望」の持てる有意義な半日だった。今後もできるだけ各地の対話に参加したいと思った。

<米永國照>

私にとって、今回の対話活動は2回目、3. 11以降では初めての対話活動であった。今回の対話を通じて感じたことは、学生諸君の、自分の意見、疑問は述べても、相手の話はしっかり聞くといういわゆる傾聴の姿勢には感心した。世の中のいわゆる討論会においては、自分の意見は声高に主張するものの、相手の意見・質問に対しては、無視、はぐらかしなどが横行して、対話が成立していないことが多々ある。その点、今回の対話は、少人数ということも手伝って、本当の意味で、対話が成立したことは喜ばしい限りであった。

<路次安憲>

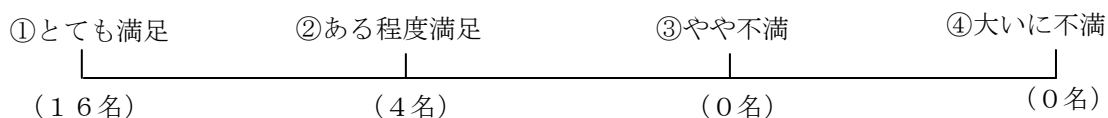
久しぶりの対話会参加で、かつ九州大学での参加は初めてであった。

東電福島事故の印象が生々しい時期における開催ということもあってか、学生の関心（反省、疑問、将来への意気込み等がないまぜになったものと思われる）は高かった。さすが九大と言わなければならないか、学生は総じてしっかりした考え方を持っており、原子力分野の社会人となって、世の中の役に立ちたいと意気軒昂であった。

私からは、原子力に“一国平和主義”はありえない、今後は世界を視野に日本の優秀な技術を広めてほしいとエールを送っておいた。

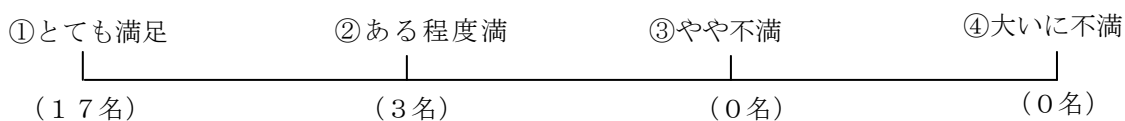
8. 学生の事後アンケート結果（アンケート回収総数20名）

(1) 講演の内容は満足のものでしたか？ その理由は？



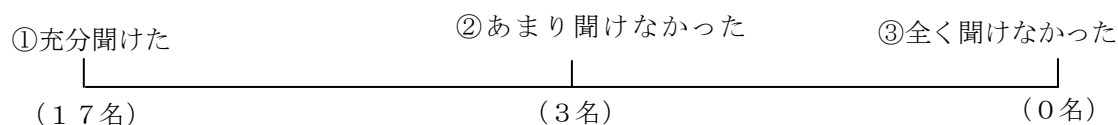
- ・ 気になっていた福島の実況等について、幅広いお話を聞いた（①の理由）。
- ・ 普段はあまり聞けないほど高レベルの話を聞いた（①の理由）。
- ・ 福島事故の説明がとてもよく整理されていた（②の理由）。 等々

(2) 対話の内容は満足のものでしたか？ その理由は？



- ・ 自分の疑問に思っていたことに対し、シニアの方から納得のいく答えを聞くことができた (①の理由)。
- ・ 現場の人ならではの話を話してもらえた (①の理由)。
- ・ 内容には満足している。もっと踏み込んだ話が聞ければうれしかった (②の理由) 等々

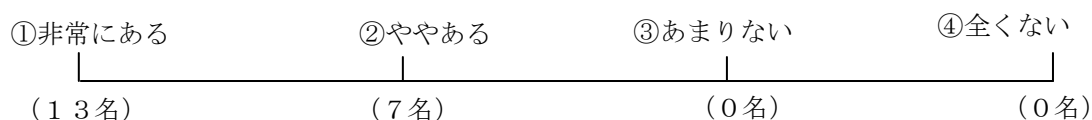
(3) 事前に聞きたいと思っていたことは聞けましたか？



(4) 今回の対話で得られたことは何ですか？

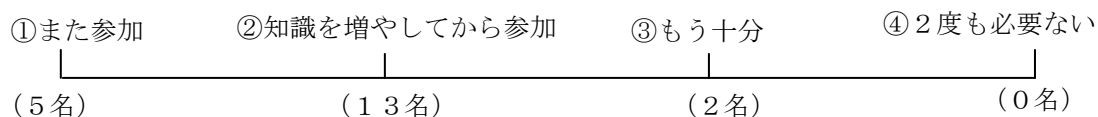
- ・ 大学で基礎学力を身につけておくことの大切さ。
- ・ 相手の話に耳を傾ける力。
- ・ 原子力に対する新しい知識と理解。
- ・ 原子力技術者になるための心構えとすべきことへの理解。
- ・ 就職希望先の情報
- ・ 自分がやりたいと思っていることに対してアドバイスがもらえた。 等々

(5) 「学生とシニアの対話」の必要性についてどのように感じますか？ その理由は？

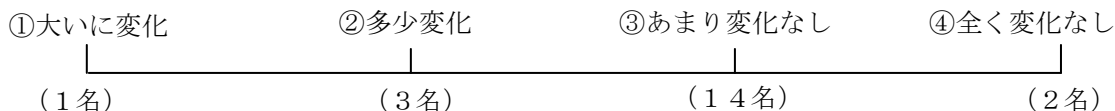


- ・ メディア等と違う視点の話を聞いて、議論することができる (①の理由)。
- ・ 現場の人にしか分からないことを聞けるから。又、モチベーションの向上に繋がる (①の理由)。
- ・ 原子力の優秀な人材を育てるために有効 (①の理由)。
- ・ 普段の講義や講演では聞けないことを直接お聞きすることができ、意見交換をさせて頂ける。(①、②の理由) 等々

(6) 今後、機会があれば再度シニアとの対話に参加したいと思いますか？

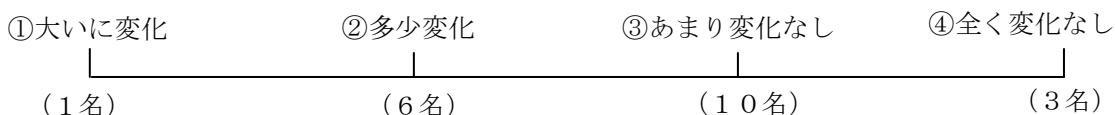


(7) エネルギー危機に対する認識に変化はありましたか？ その理由は？



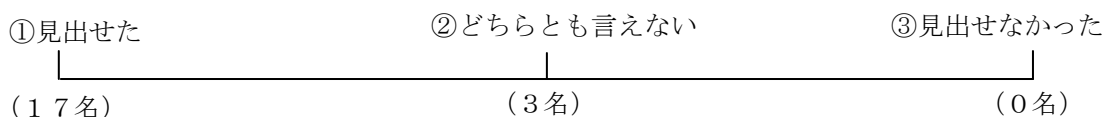
- ・ エネルギー危機に対する大まかな知識は、シニアの方とあまり違いはなかった (③の理由)。
- ・ 以前から、興味を持っていた (③の理由)。
- ・ 危機感を共有できていると感じた (④の理由) 等々

(8) 原子力に対するイメージに変化はありましたか？ その理由は？



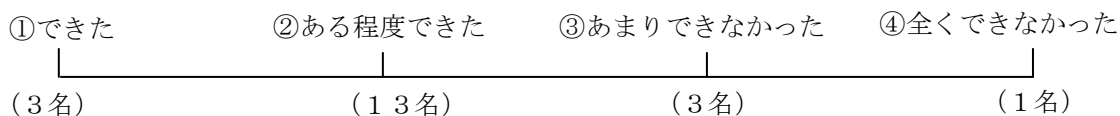
- ・ 原子力の必要性をよく理解できた (①の理由)。
- ・ 原子力とお金の問題を聞いたことで、良い方向に変わった (②の理由)。
- ・ シニアとイメージの差がなかった (③の理由)。 等々

(9) 今回の対話で自分の学科との関連性を見出すことができましたか？ その理由は？



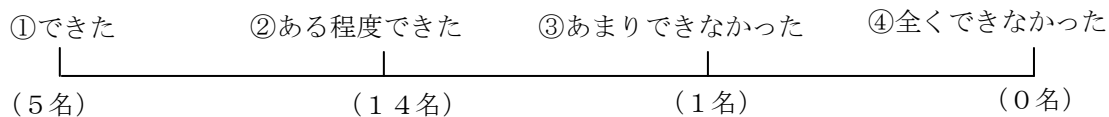
- ・ 原子力は、いろんな学問に支えられているとわかったから (①の理由)。
 - ・ シビアアクシデントに関する研究が必要不可欠だとわかったから (①の理由)。
 - ・ 核燃料についてはあまり議題に上がらなかったから (②の理由)。
 - ・ 除染の話は、非常にローテクで政治的、経済的な話だと感じたから (②の理由)。
- 等々

(10) 対話の内容から将来のイメージができましたか？ その理由は？



- ・ 今後の就職のお話や、国内のみでなく海外に目を向けるということをお聞きできたため (②の理由)。
- ・ 政治を含めて原子力が今後どうなるか予測できないため (③の理由)。
- ・ 自分自身が何をやりたいのかあまりわかっていないから (④の理由)。 等々

(11) 対話の中でシニアが思う若手の役割を理解できましたか？ その理由は？



- ・ 具体的な経験談を説かれ、求められている像というものが浮かび上がってきた。(①の理由)
- ・ シニアの意見を鵜呑みにするばかりにはならず、異なる主張もできたから (②の理由)。 等々

(12) 自分が思っていた若手の役割とシニアの考えは違いましたか？ どのような違いがありましたか？ また、シニアの考えを聞くことで、自分の考えに変化はありましたか？ できるだけ詳しくお答えください。

- ・ 考えの違いはあまりなかったと思う。
- ・ シニアの方の意見を聞いて納得し、その考えに基づいて学生生活を送っていこうと思いました。
- ・ もっと学ばなければ、若手としての役割を担うことはできないと痛感しました。
- ・ シニアの方々は、知識がとても深かったので見習いたいと思った。
- ・ シニアが若手に期待しているんだなあと、ということがとても伝わった。やる気が出た。
- ・ 自分でも、広く学問を学ぶ必要があると思っていたが、シニアの方は、より強く、基礎学力や、広く学ぶことを重視していると思った。 等々

(13) 本企画を通して全体の感想・意見などがあれば自由に書いてください。

- ・ もっと話を聞き足りなかったのが心残りでした。もう少し時間を増やして欲しい。
- ・ グループごとに部屋を分けて欲しかった。
- ・ すごくためになる企画でした。まず、こういう専門の方と話す機会が自分には無かったので、対話できたことに感謝していますし、内容的にも、自分がこれからどうあるべきか考えさせられました。
- ・ 懇親会が意外と面白かった。
- ・ 原子力業界は、「原子力村」と揶揄されるように、閉鎖的イメージを持たれている気がします。もっと直接原子力に関わりの薄い学生を迎えての講演もして頂き、原子力やエネルギーの問題意識の共有を図って頂きたいです。 等々

9. 対話の風景



学生幹事挨拶 (松本君)



開会挨拶 (稲垣先生)



基調講演



第1グループ



第2グループ



第3グループ (1/2)



第3グループ (2/2)



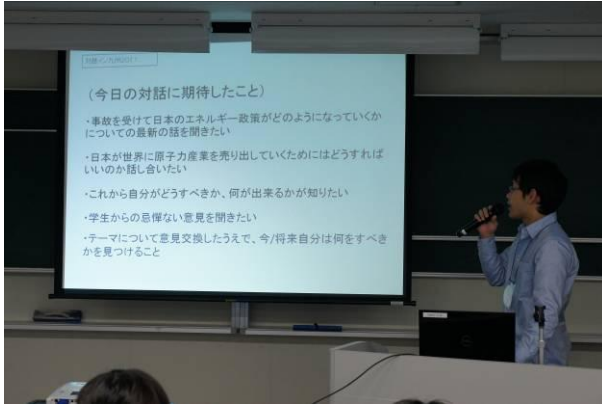
第4グループ



第5グループ (1/2)



第5グループ (2/2)



グループ別発表 (第1グループ)



グループ別発表 (第2グループ)

以上